
空想ダイブ～短編集～

kazuya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想ダイブ〜短編集〜

【Nコード】

N6504C

【作者名】

k a z u y a

【あらすじ】

短編集です。よろしければ読んでください。

空想ダイブ

ナース…次の方どうぞ。

僕…はい。

ドクター…今日はどうされましたか。

僕…なんだか最近気分が悪くて。

ドクター…ほう、どんな風に。

僕…夢から覚めても夢の中にいるような感覚で。

ドクター…ほう、あなたの職業は。

僕…学生です。

ドクター…趣味は何かおありかな。

僕…小説を書いています。

ドクター…ほう、もしかしたらあれかな。

ナース…先生、きっとあれです。

僕…あれってなんですか。

ドクター…『空想ダイブ』だよ。

僕…『空想ダイブ』って何ですか。

ドクター…簡単に言えば、あなたは空想に溺れているのだよ。

僕…意味がわかりませんが。

ドクター…現実と虚構の区別がつかなくなってくるのだよ。

僕…先生、そんな小説みたいなこと言っていないで、ちゃんと診断してください。

ドクター…ほら、もう症状が出ている。

ドクター…これは小説だよ。

壁

「なんだ、ここは。」

俺の目の前に広がったのは、広大な草原。

「どこなんだよ、ここは。」

しばらくすると、どこからともなく声が聞こえてきた。気持ちの悪いコンピュータの音声でここの景観と合わない。

『気がつきましたか。』

「何の真似だ。ムシヨに行くんじゃないかったのか。」

俺は人を殺した、口論になった末、正氣に戻ったとき、相手は息をしていなかった。

『ここがあなたの刑務所です。』

「いいのか、見渡す限り逃げ放題じゃないか。ずいぶん広い刑務所だな。」

『お前の周りは透明の壁で囲まれている。』

「え？」

確かに囲まれていた。四方、そして上下も。今にも手が届きそうな草にも触れることができない。不思議な感覚を覚える。

『お前はここで一年暮らす。』

「一年？ たったそれだけでいいのか？」

『一年後、この壁は自動的に消える。』

「これは、ガラスじゃないのか？」

『特殊素材でできている。』

「でもどうして、こんな場所なんだ？」

『無駄話をしている暇はない、今このときから一年だ。』

次の瞬間、キーンという嫌な電気音とともに声は消えた、その後、声が返ってくることはなかった。密室でない密室に閉じ込められているが、食事は一日三食どこからともなく運ばれてくるし、退屈なことを除いては、それほど苦痛ではなかった。

昼になると草原が太陽に照らされて輝き、夜は星が輝く、都会の空では決して見ることもない眺めだ。日がたつにつれて、触れることができない草を触りたくなってくる。目の前に見えているのに触れることができないというのは思ったより苦痛だった。他の何かに触れるというのはそのまま、自分の存在の証明となっているのだ。食事に運ばれてくるものを手でつかむようになっていった。感触が嬉しい。食事以外で俺が触れることのできるのは自分の体、そして冷たい透明の壁だった。

自然の中に身をおいているうち、今までのやつれていた日々を後

悔するようになっていた。もっと前にこんな場所に来ていたら、あんなことは。山でも動物園でもいい、近所の公園でも良かったのかもしれない。あの頃は心に余裕がなかった。今はじめて思い知らされる。そして見えているのに触れることができないこの環境は今の俺にとつての一番の拷問であることに気づかされる。生い茂る草に触れてみたい、あの馬の毛並みをなでてみたい、そして風をこの手で触れてみたい。

そのうちに夢を見るようになった。今までは普段と変わらないありきたりな夢であったが、少し変わった。何かに触れようとしてもすぐに逃げていく夢。物さえ逃げていくのだ。夢でも現実でも何も触れることができない苦しみを味わった。

そして、時は過ぎ、一年が経った。

不思議なことに気が狂ってしまうことは一度もなかった。この景色に癒されていたのであろう。

『久しぶりだな』

懐かしいコンピュータ音声が聞こえてきた。

「もう出所できるんだな。」

『出所？何をバカなことを言っている。』

「言っただろ？一年だと。」

『一年ここで暮らすとは言ったが、それで刑が成立するとは言っていない。』

「でも、壁は消えるって。」

『その通りだ、壁が消えることが刑の執行だ。』

「何を言っているんだ？壁が消えたら俺は自由の身じゃないか。」

『お前は今どこにいるのだと思う？』

「どこって、大自然の中だということはわかるが。」

『お前がいるのは宇宙の果てだ。』

「ここに来て冗談を言ってるのか？」

『冗談ではない。』

「そうか、ここは宇宙の果ての楽園か。ハハハ、それはいいや。」

『お前がこの一年見てきたのは映像だ、壁に映された映像だ、実体などない。』

「え？」

『壁が消えるともちろんそれに映されていた映像も消える。お前は闇に囲まれる。』

「ちょっと待ってくれ、話が違う。」

『違う、お前は人を殺したのだ。』

「・・・・・・・・。」

『もう時間だ、これより刑を執行する。』

「ちょっと待っ・・・」

男の前には闇が広がった。

何も見えず、何も触れることなく。

どこまで歩いてても何もない。

刑は執行された。

死刑よりずっと苦しい刑が。

花畑

『こうだったらいいのにな。』

「こっちだ。」

「ちょっと待って、早すぎるよ。」

「こっちだ、もうすぐだよ。」

男女が手をつないで駆けていく。

男は女をひっぱっていく。

「もっとゆっくり走ってよ。」

「早く君に見せたいんだ、ほら、もうすぐだ。」

その言葉の数秒後、辺りは色とりどりの花に埋め尽くされた。

「すごい、とてもきれい。これをわたしに？」

「そうだよ、すごいだろう。」

一面に広がる花畑。

「この辺りでいいかな。」

男女は立ち止まった。

「見て見て、こっちもあっちも一面花だらけよ。」

「喜んでもらえて嬉しいよ。」

「夢の中にいるみたい。向こう側も見てきていい？」

「あ、ちょっと待って。」

男はため息をついた。

「ふう、本当に花が好きなんだな。」

そして男はふと思った。

「あれ？ どうしてこんなところにいるんだろう。」

女が向こう側から手を振った。

「早く来て、こっちだよ。」

無邪気にはしゃぐ女を見ているとそんなことはどうでも良くなった。

男も女の後を追った。

「ねえ、橋が架かってるわ。きれいな魚が泳いでいるわ。渡ってみましょう。」

「そうだね。」

『死の瞬間がこうだったらしいのにな。』

雨とバスと恋

バス停までのほんのわずかな距離の間に夕立が降ってきた。ついてないなと思いつながら走ったが、バスがちょうど停まっていたのでプラスマイナスゼロということにしておこう。

いつもの通りあまり乗客はいない。バス会社は採算が取れているのだろうかと思心配したが、心配する意味もないので考えるのをやめた。いつもと同じ席に座る。後ろから二列目、右側の席だ。一番後ろは左右つながった長い席だから一人には広すぎて落ち着かない。

バスには先客がいた、というか、いつもいる。僕はその女性に憧れている。席に座るときに体が若干左に傾いているのはそのせいだ。僕と彼女は言わばこのバスの固定メンバーで、いつもそこにプラスアルファが加わるのだが、今日は違った。二人だけ乗せてバスのドアは閉まった。視線を窓の外にやると、さっきより雨足が強くなっていた。ふと、雨とバスと恋について唄った曲を思い出した、誰の唄だっけ。

一つ目の信号で停止している頃、自問自答が始まった。チャンスではないか、二人きりじゃないか、まあバスの運転手もいるけど。ただきつかけがない、何の脈絡もなくいきなり声をかけたら怪しまれるってもんだ。こんな世の中だから仕方ない。バスは動き出した、すぐにカーブを曲がる。ダメだなあ、つくづくそう思う。実は初めて彼女を見つけてからもう半年がたつ。その間何もできなかった、いい方法が見つからなかった、いや、ただ単に勇気がなかっただけかもしれない。だから彼女のことは何も知らない。歳も知らない、年下のようにも見えるし、年上にも見えないことはない。こんなとき、意気地なしはドラマ的展開を期待するがそんな展開はやってこ

ないのだ、そもそもドラマ的展開って何だろう。彼女が倒れる、大丈夫ですかと駆け寄る、やめやめ、考えると現実が余計に空しくなる。自分のふがいなさを空想で紛らわすのが僕の悪い癖だ、しっかりしない。

バスはさらに雨の中を進んでいく、雨の音が強いせいか車内は静まり返った印象を受ける。元々、誰も話していないし、音楽も流れていないのだから当たり前だけど、今日はやけに静かに感じる。この空間だけ外と切り離されたような感覚。でもそれが心地良いのかもしれない。

次の瞬間バスはいきなり止まった。

急ブレーキだったので体が前のめりになってしまった。びっくりした、危ない車でもいたのだろうか。少し経つとバスは何事もなかったように動き出した。今どの辺りだろう、窓の外に目をやると愕然とした。どこなんだ、ここは。

山村の風景だった、癒されそうだがそんなこと言ってる場合じゃない。運転手に何か言おうと前を見たとき、左前の彼女が倒れているではないか、チャンスだ、と不謹慎なことを考えながら彼女に近づく。大丈夫ですか。彼女は小さな声で大丈夫と返した。はじめて言葉を交わしたが、浮かれている場合ではない。とりあえず座りましょう、そういつて彼女を元の席に座らせた。とりあえず運転手に聞かなければ。あの、といいかけて再び愕然とした。運転席には誰もいなかった。傍から見れば僕の口をあけたまま立ち尽くしている状況はかなり間抜けに見えただろう。この状況になったら誰でもそうなるって、本当に。とりあえず落ち着いてみた、運転手がいらないのになぜバスは動いているんだ。動いているバスに運転手がいらないとなれば止まらないじゃないか、やばい、何かにぶつかってからじ

や遅い。急がないと、ブレーキ、サイドブレーキ、どれだ？これか？ぐいっとそれを引っ張った。次の瞬間、ものすごい急ブレーキの音と摩擦によって焦げたタイヤの嫌なおいがした。

そしてバスは止まった。はあ、くたびれた、で、ここはどこだ。

あ、彼女を忘れてた。大丈夫でしたかと尋ねると、かすれた声で大丈夫と言っているようだったがほとんど聞こえなかったので多分大丈夫じゃないだろう。とにかくバスのドアを力づくで開けた。バスの真正面には小屋があった、誰かが中にいるかも知れない。少し安堵感を覚えたが、ちよつと待てよ、あるときブレーキをかけなかったら絶対にぶつかってたよな、そう考えると別の意味でも安堵感を覚えた。

すいません、誰かいませんか。声をかけたが何の返事もなかった、鍵もかかっている。仕方なくバスへ戻る、彼女はさっきより顔色は良くなっていた。どうしようか、あ、そうだ、携帯。圏外。薄々予想はしてたけど。ああ、どうしよう、困ったな。どうしようか、彼女に尋ねても、どうしようかのオウム返し。仕方ない、何か方法があればとづくに実践してるよ。

沈黙。でもちよつと幸せ、これも不謹慎か。やっと言葉を交わすことができたのにこれじゃプラスマイナスゼロだよ。ん？ちよつと待てよ、今この状況を使って告白すればいいんじゃないか。これはピンチじゃなくてチャンスなんだよ、きつと。いつも繰り返している日常じゃこんな状況ないもんな、そうだ、チャンスなんだ。彼女が座ってる席の反対側に座って、彼女をじつと見た。なんですかといいたげな目をこっちに向けたが僕は言った、あの、

ビーツ。

いきなり音が鳴った。バスのドアが開く音、そして窓の雨、いつもの座席。夢だったのか、ちくしょう。よく考えたらそのまんまドラマ的展開じゃないか、はあ。

ため息をつく僕にそこにいて当たり前の運転手が言った、

「降りたよ。」

「え？」

「だから彼女降りたよ。」

「はあ、それで？」

「それで、じゃないよ、言わなくちゃ夢の続きを。」

夢？ どうしてそれを？

「早くしないともう行ってしまうぞ。」

僕は思わず立ち上がって前のドアから身を出した。ちらっと運転手のほうを見ると微笑んでいた。

「あの」

後ろ姿の彼女は振り返った。

「あの、あの」

夢の中の勇気など微塵も残っていなかった。

「あの、さよなら。」

彼女は不思議そうな顔をして戸惑ったように言った、

「は？さ、さよなら。」

またちらっと運転手を見ると頭をかいていた、僕に初心者だと言わんばかりに。そしてがんばれと小さく呟いた。

そして僕が降りるバス停に着いた。もう雨は上がっていた。あまり頭の中で整理はできていなかったが、バスを降りると運転手さんにありがとうございます、と頭を下げた。

何だったんだろう、僕に何が起きていたんだろう。

ただ、彼女にとっては全く意味不明の僕の「さよなら」という言葉が次のステップへのわずかな引っかかりになればいいとそのときに思った。

父さん

ビルの最上階、気持ちの良い風、許してくれ、父さん。

失業して、友人に裏切られて、恋人もいなくて、独りぼっちになっ
っちゃったよ。

母さんは父さんが死んだ後に再婚した、俺はほっとしたけど、帰
る場所がなくなったような気がした。

父さん、許してくれ。

俺はビルの淵にゆっくりと歩を進めていった。

幼い頃の父さんの記憶はひとつ。

いつも怒っていた。

「何度言ったらわかるんだ、この馬鹿息子が。」

これが父さんの口癖だった。

父さんの笑顔を見た記憶はなかった。

俺が中学のとき、病床の父さんは俺に言った。

「お前は母さんを守っていくんだ、俺が鍛えてやったからお前
はその強さがある。」

父は誇らしげに言って、そして少し微笑んだ、いや、そう見えた
だけかもしれない。

母さんは俺がいなくてもあの人を守ってもらえるさ。

さらに歩を進めて、ビルの淵にたどり着いたときだった。
かすかに泣き声が聞こえた、小さい女の子のようだった。

声のほうに行くとはやり小さい女の子が泣いていた。どうしてこんなところになん?

「どうしたんだい？」

「ママが、ママが……」

遠くから聞こえるサイレンの音で何が起こったのかわかった。急いでビルから下を見ると、人だかり、到着したパトカー、救急車、そして。

この女の子に母親の姿を見せてはいけない、何をしてあげればいいかわからずにただ立ち尽くした。そして自分があの姿になっていたのだらうと考えると血の気がひけた。

「警部、女の子を発見しました。」

「彼女の娘か、で、あんたは？」

気づくと、警部と呼ばれた男は私をにらんでいた。

俺は警察署内に連れて行かれた。

「どうして、あんな場所にいたんだ？ 立ち入り禁止だろ、あそこは。」

「すみませんでした。」

「どうして、あんな場所にいたんだ。」

俺は嘘をついた。

「あそこからの夜景を見たくて。」

「夜景ねえ。」

警部は席を立て続けた。

「あの女の子はこれからどうなるんだろうねえ。娘と心中しようと思った母親が直前になって娘を哀れに思って残したんだろう。でも残されたほうはどうすればいい。どうすればいいんだろう、君はわかるかい？」

「え、いや、」

言葉に詰まった。彼には何か見透かされているような気がした。

「一番つらいのは残されたほうなんだよ。」

警察署からの帰り道、俺は泣いていた。

俺が決意して、でもそこに先客がいて、そして刑事にさとされて。

父さんなんだろ？

父さんの仕業なんだろう？

泣きながら、そして笑った。

当然そっちには行けないようだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6504c/>

空想ダイブ～短編集～

2010年10月11日20時51分発行